

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23320084

研究課題名(和文) 印欧語史的動詞形態論研究の新展開：アナトリア諸語の役割

研究課題名(英文) A New Development of the Historical Study of the Indo-European Verbal Morphology: A Role of the Anatolian Languages

研究代表者

吉田 和彦 (Yoshida, Kazuhiko)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：90183699

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,500,000円

研究成果の概要(和文)：ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語で書かれた新資料の発見、およびこれらの言語資料に対して施された文献学的成果は、近年の印欧語比較言語学の研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。実証的な立場から収集した言語資料に対して歴史言語学および理論言語学的分析を施すことによって、それまで理解するのが困難であったアナトリア比較言語学や印欧語比較言語学のいくつかの問題を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：The discovery of new documents written in Hittite and other languages of ancient Anatolia, together with markedly improved philological and linguistic analyses, has provided us with revolutionary advances in Indo-European studies in terms of both the data-base and analytical techniques. A number of puzzling problems in Anatolian and Indo-European comparative grammar have been solved during the period of this research project by giving historical and theoretical analyses to the systematically collected data.

研究分野：言語学

キーワード：印欧語 アナトリア諸語 ヒッタイト語 比較言語学 動詞形態論

## 1. 研究開始当初の背景

比較言語学の分野において、研究の進展に大きな影響を与える要因は、従来知られていなかった新資料の発見と新しい方法論の導入である。ヒッタイト語ならびにその周辺の古代アナトリア諸言語に関する文献学的研究の近年のめざましい発展は、これらの言語を対象にした言語学的研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。量の面については、発掘・公開されたヒッタイト語粘土板は近年急速に増えた。また、象形文字ルウィ語、リュキア語、リュディア語などの古代アナトリアで使われていた他の印欧諸語についても、新資料が つぎつぎに発掘され、それにともない個々の言語の解読作業やデータの言語学的解釈が着実に進展している。また質の面では、近年の文献学的研究の進展によって、粘土板に記録されたヒッタイト語が古期ヒッタイト語(紀元前 1570-1450 年)、中期ヒッタイト語(紀元前 1450-1380 年)、後期ヒッタイト語(紀元前 1380-1220 年)に時期区分することが可能になった。これが言語学的分析の方法論に及ぼす意義ははかり知れない。なぜなら、ギリシア語史やラテン語史に匹敵する、体系的な歴史文法の構築がようやく可能となったからである。その結果、アナトリア諸語が印欧語比較研究に対して、以前よりもはるかに実質的な役割を果たす段階に到達したと言える。

## 2. 研究の目的

比較言語学の最も重要な課題は、同系統の諸言語の比較によって祖語を再建するとともに、祖語の段階から各分派諸言語が成立するまでの歴史を明らかにするである。研究の進展に大きな影響を与える要因のひとつは従来知られていなかった新資料の追加であり、もうひとつは新しい方法論の導入である。アナトリア語派の諸言語に関する文献学的研究のめざましい発展は、近年の印欧語比較研究に対して、量と質の両面から以前とは根本的に異なる視点を与えている。本研究の目的は、アナトリア諸語に保存されている古い言語特徴に基づいて、従来再建されてきた印欧祖語の動詞体系を修正するとともに、動詞形態論における未解決の問題に対して妥当な歴史的説明を与えることにある。

## 3. 研究の方法

アナトリア語派を中心に据えた印欧語動詞体系の比較言語学的研究を4年間に効果的かつ有機的に推進するために、「印欧諸言語の基礎分析作業」、「アナトリア象形文字資料およびアルファベット資料の検討」、「アナトリア楔形文字資料の検討」、「研究のレビュー」、「研究の実質的推進・総括」という5つのユニットからなる研究体制を組織する。はじめの3つのユニットは基本的に独立して研究を進めるが、研究代表者と緊密に連絡を取

り合う。また適宜、研究横断的な会合の機会を持つ。総合的な立場から研究の推進を行なうのは研究代表者であるが、各国の研究者との国際的な連携のもとで、レビューや助言を受ける機会を積極的につくる。さらに、内外の国際研究集会などに参加し、研究の成果を継続的に発信していく。

## 4. 研究成果

(1) ヒッタイト語、楔形文字ルウィ語、象形文字ルウィ語、リュキア語などの共通基語であるアナトリア祖語において、アクセントを担う基本的な単位が音節ではなく、モーラであったことを歴史比較言語学的な観点から示したことである。話し手のいない文献言語から、プロソディーについての情報を引き出すことは決して容易でない。プロソディーについての情報が文字によって書き残されていることはまれであるからである。しかしながら、文献言語の場合においても、プロソディーについての情報を導き出すことは決して不可能ではない。本研究では、アナトリア祖語の時期に生じた子音の弱化および語末の-rの消失という、一見したところ無関係な別個の2つの音法則にみえる現象に対して、モーラという観点から整合的で例外を許さない説明を施した。すなわち、アクセントのある長母音をはじめのモーラにアクセントのある2モーラ連続と再解釈することによって、直前のモーラがアクセントを有しない場合に、子音は弱化し、また語末の-rは消失すると解釈することができる。なおこの研究成果はイギリス言語学会雑誌 *Transactions of the Philological Society* 109/1 (2011)に掲載された。

(2) 一般に受け入れられている見方によれば、語幹形成母音によって特徴づけられるヒッタイト語の能動態動詞は印欧祖語に再建される語幹形成母音\*-e/o-の交替を保持していると考えられている。しかしながら、問題となる動詞を歴史言語学的な立場から分析した結果、前ヒッタイトの時期に、さらにはアナトリア祖語の時期に、語幹形成母音\*-o-を再建する実質的な根拠が見出せないことが分かった。ヒッタイト語の能動態動詞のパラダイムに共時的にみられる語幹形成母音-aは印欧祖語の\*-o-には由来しない。この-aは多くの場合、「アナトリア祖語の\*eは共鳴音が後続する開音節の位置でアクセントが先行する場合、ヒッタイト語でaになる」という音法則によって歴史的に説明することができる。また楔形文字ルウィ語の3人称単数過去形にみられる-(i)ja-については、母音\*oを含む\*-io-に由来すると考えられるが、この\*-io-は能動態ではなく、中・受動態の特徴を継承している。以上の分析によって、アナトリア祖語の能動態動詞パラダイムにふくまれる語幹形成母音については、\*-e-が一貫して再建されなければいけないことを主張し

たい。ここで引き出された知見は、語幹形成母音\*-e/o-はパラダイム内部で交替するという伝統的な印欧語比較文法においてとられている見方と根本的に相容れない。アナトリア祖語に一貫して再建される\*-e-がアナトリア語派が分岐する以前の印欧祖語の状態を保持している特徴なのか、それともアナトリア語派内部での革新的特徴なのかは、今後検証していかなければならない重要な課題である。

(3) ギリシア語-μῶν、ヒッタイト語-(h)ḥaḥat(i)、リュキア語-ḡagā という1人称単数中・受動態過去語尾は一見したところ規則的に対応し、基本語尾\*-h<sub>2</sub>e が反復した\*-h<sub>2</sub>eh<sub>2</sub>e という祖形に遡るように思える。しかしながら、これらの3つはそれぞれの言語内部の歴史のなかで二次的につくられた形式である。その理由はつぎのとおりである。基本語尾\*-h<sub>2</sub>e が反復される形態変化は後期ヒッタイト語の時期に顕著にみられるが、反復語尾だけでなく非反復語尾も存続しており、両者のあいだには機能的差異がない。もし印欧祖語やアナトリア祖語の時期に反復語尾がつくられていたと想定するならば、数千年もしくは1千年以上にわたって反復語尾と非反復語尾が自由変異の関係にあったことになる。このようなきわめて進行速度の遅い言語変化を考えることはできない。比較方法が祖語の再建という目標に向けてもっとも有効な方法であることはいままでのまではない。しかし、同時にその限界を認識することは重要である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 12 件)

- ① Kazuhiko Yoshida, “Hittite verbs in -nuzi” *Miscellanea Indogermanica. Festschrift für José Luis García Ramón zu seinem 65. Geburtstag*. 2014. 673-692. 査読有
- ② Kazuhiko Yoshida, “The thematic vowel \*-e/o- in Hittite verbs” *Munus amicitiae: Norbert Oettinger a collegis et amicis dicatum*. 2014. 373-384. 査読有
- ③ Kazuhiko Yoshida, “Hittite ḥu-it-ti-it-ti” *Proceedings of the Eighth International Congress of Hittitology. Warsaw, 5-9 September*. 2014. 1034-1041. 査読有
- ④ Kazuhiko Yoshida, “The Mirage of Apparent Morphological Correspondence: A Case from Indo-European” *Historical Linguistics 2011: Selected papers from the 20th International Conference on Historical Linguistics, Osaka, 25-30 July 2011*. 2013. 153-172. 査読有
- ⑤ Kazuhiko Yoshida, “The weak affix -nī- in Sanskrit ninth class presents” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 67. 2013.

65-77. 査読有

- ⑥ 吉田和彦, 「ヒッタイト語動詞にみられる語幹形成母音-e/a-」, 日本オリエント学会『オリエント』56巻1号. 2013. 1-15. 査読有
- ⑦ Kazuhiko Yoshida, “Return of Wackernagel: The weak affix -nī- in Sanskrit ninth class presents” *Tokyo University Linguistic Papers* 33. 2013. 363-373. 査読有
- ⑧ Kazuhiko Yoshida, “Lycian ḡawa- ‘sheep’” *Multi Nominis Grammaticus: Studies in Classical and Indo-European Linguistics in Honor of Alan J. Nussbaum on the Occasion of his Sixty-fifth Birthday*. 2013. 357-362. 査読有
- ⑨ Kazuhiko Yoshida, “The loss of intervocalic laryngeals in Sanskrit and its historical implications” *Indic Across the Millennia: from the Rigveda to Modern Indo-Aryan. Proceedings of The Linguistics Sessions of the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1-5, 2009*. 2012. 237-246. 査読有
- ⑩ Kazuhiko Yoshida, “Notes on Cuneiform Luvian verbs in \*-ye/o-” *The Indo-European Verb. Proceedings of the Arbeitstagung of the Indogermanische Gesellschaft. Los Angeles, September 13-15, 2010*. 2012. 343-351. 査読有
- ⑪ 吉田和彦, 「比較対応の幻想— ギリシア語-μῶν、ヒッタイト語-(h)ḥaḥat(i)、リュキア語-ḡagā —」日本言語学会『言語研究』140号. 2011. 1-22. 査読有
- ⑫ Kazuhiko Yoshida, “Proto-Anatolian as a mora-based language” *Transactions of the Philological Society* 109/1. 2011. 92-108. 査読有  
DOI: 10.1111/j.1467-968X.2011.01252.x

[学会発表] (計 21 件)

- ① 吉田和彦, 「古期ヒッタイト語 arnuzi ‘brings’ と sparnuzi ‘strews’」第21回西アジア言語研究会、2014年12月27日、京都産業大学(京都府・京都市)
- ② Kazuhiko Yoshida, “Hittite mediopassives in -atta” The Twenty-sixth Annual UCLA Indo-European Conference、2014年10月24-25日、カリフォルニア大学ロサンジェルス校(米国・ロサンジェルス市)
- ③ Kazuhiko Yoshida, “Hittite aušta and related forms” Ninth International Congress of Hittitology、2014年9月1-7日(トルコ共和国・チョルム市)
- ④ 吉田和彦, 「アニッタ文書の書記のころを読む」第20回西アジア言語研究会、2013年12月22日、京都産業大学(京都府・京都市)
- ⑤ Kazuhiko Yoshida, “The weak suffix -nī- in Sanskrit ninth class presents” The 32nd East Coast Indo-European Conference、2013年6

- 月 23 日、Adam Mickiewicz University (ポーランド・ポズナン市)
- ⑥ Kazuhiko Yoshida, “Return of Wackernagel” 2013 年 3 月 29 日、エルランゲン-ニュルンベルク大学 (ドイツ・エルランゲン市)
- ⑦ Kazuhiko Yoshida, “The thematic vowel \*e/o in Hittite verbs” 2013 年 3 月 29 日、エルランゲン-ニュルンベルク大学 (ドイツ・エルランゲン市)
- ⑧ 吉田和彦、「ヴァッカーナーゲルの帰還：サンスクリット現在第 9 類動詞にみられる接辞-nī-」第 19 回西アジア言語研究会、2012 年 12 月 16 日、京都産業大学 (京都府・京都市)
- ⑨ 吉田和彦、「松本克己「私の日本語系統論——言語類型地理論から遺伝子系統地理論へ——」に対するコメント」、京都大学文学研究科シンポジウム「日本語の起源と古代日本語」、2012 年 12 月 9 日、京都大学文学研究科、(京都府・京都市)
- ⑩ 吉田和彦、「歴史言語学とプロソディー：アナトリア祖語とモーラ」第 81 回九州大学言語学研究会、2012 年 10 月 5 日、九州大学 (福岡県・博多市)
- ⑪ Kazuhiko Yoshida, “Wackernagel strikes back: The weak suffix -nī- in Sanskrit ninth class presents” Indo-European Roundtable 2012 年 8 月 17 日、京都大学文学研究科、(京都府・京都市)
- ⑫ Kazuhiko Yoshida, “Word Order Change in the History of English” 語言進化国際研討會 2012 年 5 月 25 日、国立高雄師範大學 (台湾・高雄市)
- ⑬ Kazuhiko Yoshida, “Hittite verbs in -nuzi” The 31st East Coast Indo-European Conference、2012 年 5 月 19 日、カリフォルニア大学バークレー校 (米国・バークレー市)
- ⑭ Kazuhiko Yoshida, “Hittite *ḫu-it-ti-it-ti*” Indo-European Roundtable、2012 年 4 月 23 日、京都大学文学研究科 (京都府・京都市)
- ⑮ Kazuhiko Yoshida, “Some further thoughts on the thematic conjugation” Conference on Indo-European Linguistics、2012 年 3 月 6 日、京都大学文学研究科 (京都府・京都市)
- ⑯ 吉田和彦、「ヒッタイト語-āi-/-ā-動詞の起源：新たな提案」第 18 回西アジア言語研究会、2011 年 12 月 3 日、京都産業大学 (京都府・京都市)
- ⑰ 吉田和彦、「解読への挑戦——ヒエログリフから楔形文字——」、京都大学総合博物館開館 10 周年記念ワークショップ「文字：書くモノと書かれるモノの技術史」、2011 年 10 月 22 日、京都大学総合博物館 (京都府・京都市)
- ⑱ Kazuhiko Yoshida, “Hittite *ḫu-it-ti-it-ti*”

- Eighth International Congress of Hittitology (Warsaw, 5-9 September 2011) 2011 年 9 月 5 日、ワルシャワ大学 (ポーランド・ワルシャワ市)
- ⑲ Kazuhiko Yoshida, “The Mirage of Apparent Morphological Correspondence: A Case from Indo-European” The 20th International Conference on Historical Linguistics、2011 年 7 月 25 日、国立民族学博物館 (大阪府・吹田市)
- ⑳ Kazuhiko Yoshida, “The thematic vowel -e/a- in Hittite verbs” The 30th East Coast Indo-European Conference、2011 年 6 月 8 日、ハーバード大学 (米国・ケンブリッジ市)
- 21 吉田和彦、「比較対応の幻想——ギリシア語-μῶν、ヒッタイト語-(ḫ)ḫaḫat(i)、リュキア語-χagā ——」京都大学言語学懇話会第 85 回例会、2011 年 4 月 9 日、京都大学文学研究科 (京都府・京都市)

〔図書〕 (計 2 件)

- ① 佐藤武義、吉田和彦他『日本語大事典』朝倉書店、2014 年、2456 頁
- ② Jared Klein and Kazuhiko Yoshida, *Indic Across the Millennia: from the Rigveda to Modern Indo-Aryan. Proceedings of the Linguistics Sessions of the 14th World Sanskrit Conference, Kyoto, Japan, September 1-5, 2009*. Hempen Verlag: Bremen. 2012 年、250 頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

吉田 和彦 (YOSHIDA, KAZUHIKO)  
京都大学・文学研究科・教授  
研究者番号：90183699

### (2) 研究分担者

大城 光正 (OSHIRO, TERUMASA)  
京都産業大学・外国語学部・教授  
研究者番号：40122379  
森 若葉 (MORI, WAKAHA)  
国士舘大学・イラク古代文化研究所・研究員  
研究者番号：80419457